



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

古浄瑠璃『石ばし山』の特色：
頼朝天下掌握の描き方

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-02-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 黒石,陽子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/132441

古浄瑠璃『石ばし山』の特色

— 頼朝天下掌握の描き方 —

黒石陽子

(日本語日本文学研究講座)

要旨

万治寛文年間に一日一作で七日間連続上演された記録が残る作品『ゆいせき諍』『曾我物語』かわづまたのすまひろん『石ばし山』『きりかね』『剣さんだん』『ふじのまきがり』『ぜんじそが』のうち『石ばし山』について検討した。

本作は源頼朝が伊豆の地で旗揚げをし、天下を治めるに至るまでの過程を扱っている。軍記物語『曾我物語』も踏まえているが、合戦場面については『源平盛衰記』を踏まえていることが明らかである。ただし、いづれも典拠をそのままに引用するような方法とはならず、改変して構成していることが明らかである。

その特色として次の三点が挙げられる。北条時政の娘朝日の前は頼朝と結ばれるが、これは頼朝が天下を治める未来の予兆として、全六段のうち初段に配されて構成されている。合戦の場面については『源平盛衰記』から取材しているが、いくつかの逸話を選んで参戦する武士の武勇譚として描き、人間像を描くことに重点が置かれている。さらに「忠」の言葉を多用し、頼朝と家臣とからなる君臣関係を描いている。

右の特色の中には舞台芸能である人形浄瑠璃としての性格がもたらしたものも多く見られる。

キーワード：古浄瑠璃、源頼朝、石ばし山、源平盛衰記

一、はじめに

古浄瑠璃『石ばし山』は、明暦万治年間に正本が刊行されたかとされ、万治寛文年間に一日一作で七日間連続上演の記録が残る作品(註1)『ゆいせき諍』『曾我物語』かわづまたのすまひろん『石ばし山』『きりかね』『剣さんだん』『ふじのまきがり』『ぜんじそが』のうちの三日目に上演されたと考えられる作品である。内容は次の通りである。

北条時政の娘朝日の前は、未だ縁が無かったが、妹万世の娘が見た吉夢を買

い受け、その示現として源頼朝と結ばれる。一方北条時政は娘と頼朝の関係を夢にも知らず、山木判官兼隆の元に朝日の前を嫁すが、朝日の前は乳母とともに山木の館から出奔し、頼朝の元へ逃げる(初段)。朝日の前が頼朝とともにいることを知った時政は頼朝側につく事を決意する。一方伊豆に流されていた文覚は頼朝を尋ね、旗揚げを勧める。文覚は頼朝のために七日間で京を往復し、院宣を取り付ける。時政は頼朝の命により山木責めを行う(二段目)。頼朝が院宣を受け、山木責めにも成功したことを知り、多くの武士団が頼朝の元に集結し、石橋山の合戦となる。この折、工藤祐経が頼朝へ仕えることを望

み、頼朝はそれを許す(三段目)。真田与一は病後の体で参戦し、ついに討死する(四段目)。追い詰められた頼朝は土肥杉山の伏木に八騎で隠れるが、梶原平三景時、曾我太郎祐信のつさの判断により命拾いをし、安房へと逃れる(五段目)。頼朝は武蔵国船橋に入り、そこへ畠山重忠、源義経が味方に駆けつける。頼朝は勝利を得、鎌倉に入る。大場三郎と伊藤祐親は切腹となり、工藤祐経は頼朝の重臣となり、本領安堵となる(六段目)。

連作の前作『曾我物語』かわづまたのすまひろんで頼朝は伊藤祐親の元を追われて北条時政を頼って逃れたが、本作『石ばし山』では初段で時政の娘朝日の前と結ばれることにより、頼朝の運命は二段目以降大きく好転していく。時政を味方に得た頼朝は山木責めを起こし、これを契機として石橋山の合戦となる。一旦は敗退するものの、土肥杉山で九死に一生を得て安房へ逃れ、やがて勝利を得て鎌倉入りする。本作は流人であった頼朝が運気を掴み、東国の武士団を味方につけて、遂には天下を掌握する過程を描く内容となっている。

その特色として次の三つの要素が注目される。一つは初段で朝日の前が吉夢を妹から買う逸話を扱い、加えて朝日の前の闊達な人物造形を通して強運を持つ頼朝を描くことである。『曾我物語』でも扱われる吉夢の逸話だが、本作ではこれを初段に配することにより、二段目以降に描かれる頼朝の開運の予兆としての役割を持たせている。二つ目は、二段目以降六段目まで合戦の逸話を中心とするが、合戦場面の少ない『曾我物語』には抛らず、『源平盛衰記』を用いて編集し、参戦する武士達の逸話を描くことで、合戦の展開と人間像を描くことである。そこには舞台芸能であるが故の工夫も見てとれる。三つ目は武士たちが頼朝との主従関係を結ぶ時に「忠」の言葉を多用しており、この作品独自の価値観を加えていることである。

『ゆいせき評』『曾我物語』かわづまたのすまひろんではもっぱら『曾我物語』を踏まえながら人形浄瑠璃という舞台芸能、浄瑠璃という語り物の特性を生かした創意を見て取ることができたが、本作はそれに加えて頼朝という存在を軸に据えることを中心に、頼朝に関わる様々な人物を描くことに重点が置かれ、それらを通して頼朝が天下を掌握していく過程に注目している。以下具体的に述べていくこととする。

なお本文引用については『石ばし山』は『古浄瑠璃正本集 第二 増訂版』(注4)

により、読み易さを考慮して、適宜漢字をあてた。『曾我物語』は日本古典文学大系『曾我物語』(注5)、『源平盛衰記』は『源平盛衰記(四) 中世の文学』(注6)によった。

二、朝日の前の描かれ方と頼朝

この部分は『曾我物語』巻二「時政が女のこと」「橘の事」「兼隆聲にとる事」によっている。『曾我物語』では先腹の娘が朝日御前で二十一才、後腹の娘は二人あり、十九才と十七才である(後腹の二人の娘の名前は明記されていない)。先腹の娘について『曾我物語』では

先腹二十一は、美人のきこへ有。ことに父、不便に思ひければ、妹二人よりは、すぐれてぞおもひけり。

とある。『石ばし山』初段ではこの部分を次のように書いている。

女子には、朝日の前とて、容顔殊に麗しく、衣通姫の流れを汲み、小町がすさみし筆の跡、御心にかけて給へば、其情を聞及ぶ人ことに、心をかけぬは無かりけり、しかれ共いかなる前世の宿縁にか、千束に組める錦木の、たゞ徒に朽ち果て、生年廿一才まで、むなしく月日を送らる、此兄弟は、先腹にて、乳房の母に後れさせ給ひけり。

一方後腹の娘は『石ばし山』初段では二人ではなく一人であり、次のようにある。

扱当腹は、万世の姫とて十九才、父母の寵愛浅からず。

『曾我物語』における朝日御前は、時政がとりわけ「不便」に思っており、後腹の二人の娘よりもかわいがっている。妹が見た吉夢を朝日御前が買う代わりに与えた唐の鏡は、北条家に伝わる由緒正しきもので、日頃から妹が自分の

ものとしたいと思つていたものである。^(注)時政は三人の娘の中でも朝日御前を特別に扱つていたのである。しかし『石ばし山』ではむしろ、後腹の娘万世の姫の方が両親に愛情をかけられている。容貌や才能に十分恵まれながらもなぜか二十一才まで縁を得ず、さらに腹違いの妹の方が、両親から愛されているという状況が、朝日の前に「自分の人生がこのままであるはずはない」という思いを増幅させる。それゆえ、妹から夢の話聞かされ、彼女の持つ教養からこれを吉夢であると判断した朝日の前は、妹を騙してその夢を我が物にしようとするのだが、本作では『曾我物語』には描かれなかった、朝日の前の鋭敏で意欲に満ち、狡猾な側面を強調する。本作では「しすましたり」という朝日の前の内言語を二回使つて、妹から吉夢を奪い取つた喜びの心情を赤裸々に表すのである。

また、山木判官兼隆の元に嫁せられ、逃亡するところについては『曾我物語』が

一夜をもあかさで、その夜のうちに、にげいでて、ちかくめしつかいける女房一人具して、ふかき叢をわけ、足にまかせて、あしびきの山路をこへ、夜もすがら、伊豆の御山にわけ入給ひぬ。

とあるのに対し、『石ばし山』初段では

いたはしや姫君は、さなから夢の心地して、涙に暮れておはします、兼隆とかくいひ寄りて、慰めけれ共、つやく返事もまします、兼隆面目失ひ、傍らに立寄りけり、既に其日も暮れければ、姫君時分よしと思召、乳母一人御供にて、山木が館を忍び出、伊豆のお山を心かけ、契り朽ちすは出雲路の、神の誓いに今一度、佐殿に巡り合はせて給はれと、足に任せて落ちらる、

とあつて、兼隆との対応ぶりを具体的に描く。これは舞台上で人形によって演じられたことが大きく関わっていると考えられるが、面目を全く失つて困惑している兼隆の前に、ひたすら拒絶している朝日の前の様子は、いかにも意思強固

で強烈な個性を持った女性を感じさせる描き方となっている。そして『石ばし山』ではこの後、姫と乳母を追つてくる山木側の追手に対し、たまたま通りかかった乳母の伯父文せう阿闍梨が同宿らと共に辺りの古木を引き抜いて、追手をやつつけるという活劇が展開する。その後阿闍梨が朝日の前を軽々と背負つて宿坊に立ち帰り、頼朝に使いを送つて、頼朝と朝日の前が手を取り合つて喜びの再会を果たすというハッピーエンドとしているのである。初段のまとめともいふべき段末表現は次の通りである。「朝日の前の心のうち、頼もしき共、中々申す計はなかりけり」。朝日の前の強固な意志と大胆さ、そして行動力に対する賞賛である。

そもそも『曾我物語』では、頼朝が天下を取る未来を暗示する話が随所に散りばめられている。「橘の事」では、吉夢について橘の故事が紹介される中で「幾程もなく、若君いできたり、頼朝の御後をつぎ、四海をおさめたてまつ」と、朝日御前がやがて頼朝の妻となり、子供が頼朝の後を継いで天下を治めるといふ記事がある。その後、盛長が頼朝の命に背いて、頼朝の手紙を書き換えて朝日御前の元に届ける所では、次の引用文のように手紙を受け取る前に既に朝日御前は予兆ともいふべき夢を見ている。

この暁、しろき鳩一つとびきたりて、口より金の箱に文をいれてふきいだし、わらわが膝の上におき、虚空にとびさりぬ、ひらきて見れば、佐殿の御文なり、いそぎ箱におさむるとおもへば、夢なり、今現に見る事、不思議さよとおほしめして、うちおきぬ。

そして、朝日御前が頼朝を追つて、二人で伊豆の奥に隠れた後、盛長と頼朝が見た夢を懷鳥平権守が占うと、これが頼朝の開運を示すものであると判じられるという話が続く。このように『曾我物語』では繰り返し頼朝の開運と天下掌握を暗示する話を描き、その後山木責めへとつながっていく。朝日御前が吉夢を買つた逸話はそれらの中の一つに過ぎない。

それに対し『石ばし山』では、初段において朝日の前と頼朝が結ばれることが、頼朝の運命の重要な転機であるとして扱っている。頼朝の強運の暗示は朝日の前が吉夢を買うという逸話に意識的に集約され、朝日の前の人物造形を

『曾我物語』を踏まえながらも、さらに強さとしたたかさを備えた闊達な女性にし、そのエネルギーと行動力が頼朝の強運を始動させるものとして描くのである。このように朝日の前の登場によって頼朝開運の予兆が描かれた後、二段目以降はいよいよ頼朝の旗揚げへと話は展開していく。

三、合戦の逸話の扱い

『石ばし山』は二段目で山木責め、三段目以降石橋山の合戦を描くこととなるが、これについて『曾我物語』では巻第二「頼朝謀反の事」「兼隆がうたる、事」「伊東がきらる、事」で扱っているものの、概略を説明する内容で、合戦や戦況等の詳しい状況は描いていない。そのため『石ばし山』では『源平盛衰記』を参照して、それらの詳しい様子を描いたと考えられる。しかし必ずしも『源平盛衰記』をそのまま用いているというわけではなく、その描き方には『石ばし山』独自の特色を見ることができるといえる。

一つは集団戦を描くことをせず、数人の武将に焦点を絞り、一人一人の武勇譚を描いていることが挙げられる。また『源平盛衰記』には見られず、『石ばし山』が独自に入れ込んだと思われる逸話もある。さらには四段に見られるように、暗闇での戦闘を描く場合、文章表現に工夫が凝らされており、場面の暗さを観客や読者に一層意識させる効果をねらう手法も用いられている。

『石ばし山』が合戦場面等を描く上で『源平盛衰記』を参照にしたと思われるものを列挙すると次の通りである。

二段目 文覚が頼朝に謀反を勧め、七日間で都から院宣を取ってくる。

『源平盛衰記』巻十九 文覚入定京上

『平家物語』流布本 巻五 伊豆院宣の事

頼朝は山木判官を北条時政らに責めさせる。

『源平盛衰記』巻二十 八牧夜討

三段目 東国武士、頼朝の元に集結。石橋山の合戦の開始。

『源平盛衰記』巻二十 佐殿大場沙汰 石橋合戦

四段目 真田与一の討ち死

『源平盛衰記』巻二十 石橋合戦

五段目 頼朝の伏木隠れ

『源平盛衰記』巻二十一 兵衛佐殿隠臥木

六段目 頼朝武蔵国船橋に到着

畠山重忠士官を乞う

『源平盛衰記』巻二十三 畠山推参

義経が頼朝を訪ね、兄弟の再会

『源平盛衰記』巻二十三 義経軍陣来

頼朝の勝利と鎌倉入り

『源平盛衰記』巻二十三 頼朝鎌倉入勸賞

大場三郎、伊東祐親の切腹

『源平盛衰記』巻二十三 平家方人罪科

工藤祐経の本領安堵

『源平盛衰記』巻二十三 頼朝鎌倉入勸賞

このうち二段目、三段目、四段目に合戦に関する描写が多く活用され、同時に『石ばし山』独自の工夫も加えられていると考えられる。

二段目では文覚が七日間で京都と伊豆を往復し、院宣を頼朝の所に持参することが描かれるが、これは『曾我物語』には無く、『源平盛衰記』と流布本『平家物語』の中に見られる。しかし、内容を簡略化しており、本文をそのまま利用していることは無い。

二段目で注目されるのは山木責めの部分である。ここは『源平盛衰記』巻二十 八牧夜討を踏まえているところだが、『石ばし山』では初めに北条時政と山木判官の間で名告りがあった戦いを開始する。しかしこの部分は『源平盛衰記』には無い。続いて二つの武勇譚が展開する。一つは佐々木次郎経高と権の守兼時の戦い、そして加藤次景門の活躍である。

佐々木治郎経高と権の守兼時の戦いは『源平盛衰記』では次のように書かれるだけである。

佐々木搦手二廻リタリケルガ、次郎経高後ノ木戸口マデ攻入テ散々ニ戦ケ

ル程二痛手負タリケレ共、尚独城ノ内ニ打入テ、兼隆ガ後見ニ権頭ト云ケル者ガ頸ヲ取テゾ出タリケル。

それを『石ばし山』では経高と兼時の言葉戦いから戦闘までを描き、半時ほども戦った後、遂に経高が兼時を討つまでを描く。

また大男の兼時が長刀を武器に登場するのに対し、経高の武器は一丈ばかりの檜の棒というところも『源平盛衰記』には書かれていない。経高の名告りも『石ばし山』独自のものである。

平治より此方、源氏与力の輩は、経高に限らず、深山幽谷に身を隠し、有か無きかに世を送り、佐殿院宣を蒙り給ひ、かくと宣ふ嬉しさに、人並々に罷出ては候へ共、太刀も刀もあらばこそ、夕べ三島の町にて、此棒一本求めたり、御辺の長刀に合はん事、いか、とは思へ共、刃試しに立ち寄つて見給ふべし、いかに〜。

平治の戦で敗れた源氏方の武士達が、捲土重来と闘志をたぎらせている心境が記されている。長刀と檜の棒を振り回す二人の武者による激しい戦いぶりが、舞台上で人形によって演じられると、視覚的にも十分な面白さを提供したであろうことが想定される。

次に加藤次景門の活躍であるがこれも二つある。一つは関谷八郎との戦い、そして山木判官兼隆を討ち取る場面である。いずれも『源平盛衰記』を踏まえながら、少しずつ改変している。その結果『源平盛衰記』では「傍平見スノ猪武者」で「傍若無人」の景門の人物像に若干の変化をもたらすこととなった。一つは強弓で聞こえた関谷八郎が、「残り一筋の矢を射る上は雑兵では意味がない。北条、岡崎、土肥、土屋、加藤次景門、佐々木兄弟が相手であれば、不足は無い」と言い放つ。これを聞いた景門は自分こそが受けて立とうと表に出ようとするが、それを傳の須崎は押しとどめる。須崎は自分が身代わりになって「景門」と偽って名告り出、関谷に最後の矢を射させてしまうので、その後に出て関谷と戦うように進言する。そしてその通りに須崎は「景門」と名告りを出して表に出るや、忽ち関谷の放った矢に射殺される。すぐに景門は踊り出

関谷八郎と太刀で半時ばかりほど戦い、景門は八郎を討ち取る。この部分について『源平盛衰記』では、八郎の名告りを聞いて、景門が自分から須崎に身代わりを頼み、代償に須崎の老母の世話を見ることを約束する。須崎は長く仕えた景門の命令故に従うというものである。一方『石ばし山』では須崎がとっさに自らの判断で、主君の身代わりをし、代償も求めていない。景門と須崎の間の君臣関係の描かれ方に以上のような相違がある。さらに後半、景門はそのま山木判官兼隆の城の中に入り、たちまち兼隆を取って押さえて首を取った。ここも『源平盛衰記』では景門は城内に入った後、頼朝から賜った長刀と、兜を使って小細工をして討つ。こうした狡猾さを『石ばし山』では取り上げず、景門の堂々とした武勇としてのみ描く。そして段末表現では「此人々の手柄、貴賤上下おしなめ、感ぜぬ者こそ無かりけれ」で終わっており、この段が頼朝を取り巻く、武士団の活躍ぶりを描いた段であったことが確認される。

三段目で注目されるのは北条時政の嫡子三郎宗時の戦いぶりとして討死である。これは『源平盛衰記』には見られず、『石ばし山』が付け加えた逸話と考えられる。『源平盛衰記』では巻第二十 楚効荆保で「北条次郎宗時ハ波打ギハラ歩セ落ケルヲ、伊豆五郎助久係並テ取組ンテ落ニケリ、両虎相戦テ互ニ亡命留名ケリ」とあり、その具体的な戦いぶりは記されない。

『石ばし山』では、北条時政と大場三郎景親が言葉戦いをし、業を煮やした大場の従兄弟萩野十郎が時政に戦いを挑むと、時政の嫡子宗時が父時政を倒し、のけてそれに答え、横手切りで萩野を倒す。続いて早業で次々と大場方を倒していくが、いきみの八郎の首を取ったあと、大場方の郎等に散々に切られ、宗時は遂に立腹を切つて息絶える。この段での戦闘場面として華やかに描かれるが、同時に北条時政が嫡子を失う場面でもあり、時政は頼朝側について、早々に長男を失ったことになる。

四段目前半は岡崎四郎義実の嫡子真田与一の討死を描き、後半は敗色濃くなった頼朝勢が杉山へと落ちていく時、佐々木四郎高綱が活躍する様子を描く。

『源平盛衰記』では与一が二才の時から親代わりとなって育ててきた郎等文三家安が与一の供として出陣し、与一の討死を知った後、勇壮な戦いをして自らも討死した様子を詳しく描くが、『石ばし山』では全てを省略している。与

一と股野の組み討ちと死闘を描くことに焦点を絞り、文三の逸話については意識的に削除していると考えられる。

さらに『石ばし山』では一段中に「暗さは暗し」という表現を四回も用い、加えて「雲透きより」「雲透きに」という表現を用いて、この時の天候の悪さ、暗さとそれによる視界の悪さを強調している。恐らく当時の舞台上では、他場面と照度を変えて演じることは困難であったと考えれば、この場面の暗さを観客に意識してもらうために、絶えず言葉で繰り返し返して語ることが必要だったのではなからうか。与一の討死が重病の身の上と、この天候の悪さとの双方に起因したものであり、剛勇として知られた与一がこのような形で最期を遂げることが、源氏方にとっていかに衝撃的なことであつたかを描くのである。

そして嫡子を失った岡崎四郎にとっては何よりも無念なことであつた。『石ばし山』では与一が討たれた時の状況を次のように記す。

真田与一義貞をば、景久頸を取つたりと、高らかに呼ばはれば、岡崎早く聞きつけ、君の御前に参り、義貞こそ討死仕り候と、申しも果てず、涙をばらくと流しけり。頼朝聞し召し、あら不憫や。汝が心さそ有るらん。

与一の親代わりともいべき文三の逸話を一切削除したのは、父岡崎の悲しみを描くために行つたと考えることができる。

三段目では北条時宗の討死を描き、四段目では真田与一の討死を描く。これは頼朝に従つた二人の武将北条時政と岡崎四郎がそれぞれに嫡子を失つたことを描くものであり、この戦いの悲劇的側面を表現している。

四、「忠」の意識

初段冒頭に

扱も其後、つらつら世間を観するに、臣忠を尽くす時んば、君是を掬ふに賞を以てし、臣不忠なる時んば、君是を報ふに罰を以てす、賞罰禍福は、己が身にあり

とある。これは初段では頼朝の臣下藤九郎盛長の行動を指すものとなっているが、そのみならず、『石ばし山』六段全段を貫く考え方と見ることができ。また各段の随所に「忠」「忠孝」「不忠」などの語句が散見され、それが頼朝に対する各武士の行動様式の意味を示すものとなっている。さらに注目すべきは、この冒頭表現は君に仕える臣下として持つべき心構えを、臣下の立場から述べていることである。中心となるのは君主の態度・行動ではなく、臣下側のそれである。以下具体的に述べることにする。

初段については次の場面である。頼朝が北条時政の娘のうち、当腹の十九才の娘に手紙を送ろうとするが、使いを命じられた藤九郎盛長が、先腹の朝日の前にこそ手紙は渡すべきであると判断し、頼朝に内緒で勝手に自分で手紙を書き換え、朝日の前に渡すところである。これは『曾我物語』の該当部分を踏まえながらも、『石ばし山』が改変している。

『曾我物語』では、頼朝が時政には娘が沢山いると聞いて好色な気持ちを起こし、内情を人に尋ねたところ、「当腹二人は、ことのほか悪女なり。先腹二十一の方へ、御文ならば、たまはりてまいらせん」と言われるが、頼朝は伊藤入道のところでは先腹の娘と結ばれたことにより、継母の嫉妬から事が起こったことを思い起こし、悪女でも当腹の娘にしようと考えて手紙を書く。しかし盛長はよくよく考え、頼朝は悪女では最後まで添い遂げようとはせず、その結果北条時政から憎まれることとなり、居場所がなくなるに違いないと判断し、

果報こそ(注)(傍線筆者、以下同じ)、おとりたてまつるとも、手跡は、いかでかおとりたてまつるべき

と自分で朝日御前宛の手紙に書き換えて局に渡す。これを『石ばし山』初段では

つくく物を案ずるに、十九の君は、殊の外の悪女也、我が君聞召遂げん事難し、さあらば結句北条にさへ、御中違わせ給ふべし、廿一の御方へ取かへはやと、忠にて御文書き直し

と改めている。

ここにおける「忠」の内実とは次のように考えられる。主君頼朝の将来を考えた時に、当腹の娘に手紙を届けては危ういことになる。かといって主君から預かった手紙を臣下の身でありながら、勝手に改竄するのは許される行為ではない。しかし盛長は敢えて、主君の危機を救うため、自ら判断し切腹を覚悟でこの行為に及んだのである。そして盛長の判断は正しかった。朝日の前と結ばれたことにより、頼朝は時政を確実な味方とすることができたのである。

二段目は「其後、北条時政は、朝日の前、山木が館を忍び出、佐殿諸共、伊豆のお山におはします由聞くよりも、大きに驚き、兼隆が所存も知り難し、又頼朝の御事いか、せんと、呆れ果て、ゝいたりしが」という冒頭から始まる。娘が頼朝と結ばれたことを時政がいつ知り、どのような行動をとったかについては『曾我物語』と『石ばし山』では時期も経緯も異なる。

『曾我物語』では時政が京から下向する道中でそれを知る。平家にこのことが知れてはと動揺し、また道中同行していた山木判官兼隆に聲にしようと既に約束していただけに時政は困惑する。しかし時政は敢えて知らぬふりをして、朝日御前を頼朝の所から取り返させて山木の元に嫁す。朝日御前が一夜も明かさずに頼朝の元に逃げた後、山木は捜索を続けるものの行方は知れず、時政は敢えて知らぬふりをして通す。この行為を『曾我物語』では

伊東がふるまひにはかはりたるにや、果報のいたすところなり。

としている。

一方『石ばし山』では時政は、頼朝と朝日の前の関係を本当に知らなかった（「此事夢にも知らざれば」）。知らずに山木の元に嫁したところ、朝日の前逃亡という事件が起き、驚愕する。その時時政は次のように行動した。

忠にて心を引かへし、げに／＼我らが先祖、直方は、伊予の守頼義を簪に取、八幡殿、其外公達いでき給ふ、かつうは先祖の吉例、其上佐殿、今こそ流人にてまします共、一度は御運開き給はん事、案の内と存すれば、密かに移し奉り、我が身は知らざる体にもてなし、いよ／＼忠を尽くせし

は、末繁昌の基也。

『曾我物語』では時政の取った行動が、先を見通した計算したものであり、かつての伊東祐親とは異なる対応であったことを「果報」と表現しているが、『石ばし山』では「忠」の語句を用いており、『曾我物語』のように、時政の策略や狡猾さや見通し、さらには運の助けのあるものという考え方はなく、源家の子孫である頼朝に忠を尽くして臣下としての行動をとるといふ形になっており、それが北条家繁昌の基となったと記している。

そもそも本作の前作『曾我物語』かわつまたのすまひるん六段目で、北条時政は伊藤祐親に追われて逃げてきた頼朝を匿うことにする。この時、一門を集めて意見を聞くが、時政の考えは「此度頼まれ申す、後日の奉公に備へんと、思ふはいかに」である。頼朝を受け入れることを北条の破滅と捉えたつのだぎのや太郎は強硬に反対するが、時政は「それ侍が一言契約仕り、たとへ一命を失ふとも、違変する事有べきか」と押し切る。や太郎が従わないので、時政の命により、嫡子時宗がや太郎を成敗する。段末表現は

是と申すも子孫長く、天下の執権仕り、栄華に榮へし、その印とぞ聞こへける、かの時政の所存、頼もしきとも中々、貴賤上下をしなべて、皆感ぜぬものこそなかりけれ

となっており、時政の判断を評価している。一方『曾我物語』では「北条四郎時政がもとにおはせし也」とのみあって、時政の考えは記されていない。『石ばし山』では時政には頼朝を匿った時から既に頼朝側に付く考えと覚悟があったという前提の元、朝日の前が頼朝と結ばれたことを知って、明確に君臣関係を結ぶことを決断することになるが、その時の判断の拠り所が「忠」であると考えられる。

三段目では頼朝の元に東国の武士たちが結集し、いよいよ石橋山の合戦が開始される。『源平盛衰記』を踏まえた部分があるが、三段目は『曾我物語』にも『源平盛衰記』にも拠らない部分がある。そのうちの最後の部分、伊東祐親が追い詰められるものの、息子祐清の加勢によって虎口を逃れ、その後、工

藤祐経が、討ち取った武将の首二つを持って、頼朝の元にかけて、頼朝に仕えることを申し出る場面である。ここでは祐経が伊東祐親に対する遺恨を述べ、次のように申し出る。

かやうくの次第にて、伊東に遺恨候ゆへ、同じくは祐親を手にかけて、君の御目にかけんため、随分うか、い候へ共、度々討ち漏らし、力及はず、是迄参り候也、ものその数には候はね共、それかしが一命をは、君に捧げ候。

これを聞いた頼朝は次のように言う。

扱は祐経にて有けるか、汝か心もさぞ有らん、御分か心をもつて、頼朝が所存を、察すべし、向後忠を尽くすべし、我本望遂ぐるものならば、本領は子細なし。

これに対し祐経は「祐経有かたしくと、いよく忠を尽くしけり」とする。『石はし山』では頼朝と祐経の間では、伊東祐親に対する恨みを持つ点では共通しており、互いにその思いを察しながら、主従関係を結ぶとしている。ここも忠を尽くすことよって主従関係が成立するという考え方である。

四段目には「忠」に関する語句は使われないが、五段目には再び「忠孝」の語句が使用される。この段は石橋山の合戦で頼朝側が敗れ、頼朝らが杉山の伏木の中に隠れるという場面である。そこを梶原平三景時と曾我太郎祐信が搜索し、頼朝らを見つづけるのだが、それを大場三郎には伏木の中には誰もいないと偽って助けるというところである。これも『源平盛衰記』巻第二十一を踏まえているが、『源平盛衰記』では伏木の中を捜すのは梶原一人で曾我太郎祐信はその場にいるが、梶原と共に伏木の中に踏み込んではいない。また頼朝が梶原と顔を見合わせ、頼朝は自害しようとして刀に手をかけようとした時、梶原が次のように言う。

暫く相待給へ、助け奉べし。軍に勝給たらバ公志給ナ。

この部分を『石はし山』では次のように改変している。まず『石はし山』では梶原と共に曾我太郎祐信二人が伏木の中に入る。二人は頼朝と顔を合わせ、頼朝が自害しようとするのを二人が引き留める。そして

暫く御待ち候べし、御運を開かせ給は、今の忠孝忘れ給ふな

と頼朝に対して言うのである。

『源平盛衰記』でのこの部分は「公」とあり、これは諸本の校異によれば「公(きみ)」つまり頼朝を指す意味と、「奉公」梶原が行った頼朝の命を助けた行為を指す意味との二つが考えられる。「奉公」の意味であれば、「御恩」と「奉公」の関係性の中で考えることができ、梶原が頼朝の命を救った行動は今後の頼朝から与えられるべき「御恩」を前提としていることとなる。一方、『石はし山』の「忠孝」は、梶原と曾我太郎祐信が、今後頼朝を君主として仰ぐ意識が明らかであり、頼朝に対する忠誠心を示すことになる。

六段目は杉山の伏木隠れで九死に一生を得た頼朝が、再び武蔵の国に入り、そこに畠山重忠が白旗を掲げてやって来る。頼朝は重忠の父親をはじめ親族が平家方であることから警戒するが、重忠は頼朝を説得する。その折「君の御ため、いさ、か不忠も候はず」という語句が出てくる。頼朝は重忠を臣下とすることとする。

以上のように、頼朝に仕える武士たちを描く時、『石はし山』では臣下の「忠」により君臣関係が成り立つという姿勢を取っているのである。そして「果報」という語句は、『曾我物語』では盛長や北条時政に使われていたが、『石はし山』では頼朝に対してだけ用いられている。ここに『曾我物語』や『源平盛衰記』とは異なる『石はし山』の君臣関係に対する視点が現れていると考える。

『石はし山』で「果報」の語句が使われている場面を確認してみると、五段目の段末表現「佐殿の御勢、程なく十万余騎に成給ふ、昨日に変わりし御威勢、頼朝の御果報、何に譬へん方も無し」と、六段目段末表現「頼朝は、日本国を、思ひのま、に打ち従へ、征夷大將軍の、武將に具わり給ひけり、頼朝の御果報、貴賤上下おしなへて、皆感ぜぬ者こそ無かりけれ」である。いずれも

頼朝が強運に恵まれた特別な存在であることを示す表現になっている。『石ばし山』では強運に恵まれた頼朝の元に「忠」を尽くす臣下が集まることにより、頼朝の天下掌握が実現したとして描くのである。

五、まとめ

古浄瑠璃『石ばし山』は流人であった源頼朝が東国の武士団を味方に付け、遂には天下を治めるに至るまでを描いている。その描き方の特色としては次の三点が挙げられる。一つは『曾我物語』を踏まえながらも北条時政の娘朝日の前の描き方を改変し、頼朝の運気を具体的に動かす契機となったのが朝日の前の存在であったという構成の仕方である。二つには合戦場面を描く場合に『源平盛衰記』を踏まえながら、数人の武将の武勇譚を描く形を取り、同時に二人の若者の討死を描き、その父親の嘆きにも触れて合戦の中の悲劇も描いている。三つには臣下による「忠」が頼朝の天下掌握を導いたとして、頼朝と臣下の関係を描いていることである。

一つめの朝日の前の描き方の改変については、人形浄瑠璃である故の制約も手伝っている面があるかと考えられる。『曾我物語』では古夢や霊夢など、多くの夢についての話が重ねて書かれ、これによって頼朝の開運が次第に確実なものとして捉えられていく描かれ方になっている。しかし、舞台芸能である人形浄瑠璃では、この方式では舞台的効果は望めない。したがって朝日の前の人形造形を『曾我物語』よりも強く、行動的にすることに、頼朝の置かれていた状況が具体的に見える形となり、その運気の強さが明確になるのである。

二つめの合戦の描き方も、人形浄瑠璃としての特性を生かしたようになっていいる。武者の一騎打ちは人形の働きがあり、舞台効果が最も上がるものである。言葉戦いや名告りも面白く聞かせる所であったであろう。しかし逆に、各武将についての詳しい説明は省略せざるを得ないこととなり、加藤次景門などは『源平盛衰記』の記事に比べると平板な人物になってしまふことになった。

三つめの「忠」の問題は、初段の冒頭表現のあり方にも関係する。角田一郎氏が指摘されたこと^(注10)、古浄瑠璃の初段冒頭に序詞があるのは『いけどり夜うち』(寛永二十年刊)に見られるとされるが、本作もこの序詞があるものであ

り、表現内容は本作全体を貫くテーマ性を持ったものとなっている。後の人形浄瑠璃作品に、この序詞は延々と継承され、作品を貫くテーマを示す重要な語り出しとなる。このことを考えると、本作の制作が、一作品の中で一つのテーマを元に構成しようとする意識の元に行われていることが窺われ、「忠」の意識に基づく君臣関係、とりわけ臣下の態度と行動が問題とされ、それらの成果が君主頼朝を押し上げて、天下掌握へと導いたとする書き方であることが分かる。同時に、人形浄瑠璃はかなり早い時期から序詞を用いる構成が意識されていたと想定される。

以上述べてきたように、古浄瑠璃『石ばし山』は、頼朝天下掌握のテーマの元、『曾我物語』『源平盛衰記』を踏まえながらも古浄瑠璃としての構成意識に基づき、舞台芸能としての効果をあげるべく創作されていることが明らかである。

注

- (1) 『古浄瑠璃正本集 第二増訂版』一九八二年 角川書店。『石ばし山』解題。
- (2) 安田富貴子氏「紀州和歌山宇治の産・宇治加賀掾の世界」『古浄瑠璃―太夫の受領とその時代』一九九八年 八木書店。
- (3) 『古浄瑠璃『ゆいせき譚』『曾我物語』かわづまたのすまひろん』の特色―叙事文学の演劇化― 東京学芸大学紀要 人文社会科学系Ⅰ 第六十三集 p.137～147。二〇一二年一月
- (4) 注1と同書。
- (5) 一九七四年 岩波書店。底本は東京大学附属図書館青洲文庫蔵 十行古活字本。
- (6) 一九九四年 三弥井書店。底本は内閣文庫蔵慶長古活字版。
- (7) 「この二十一の君をば、父ことに不便におもひければ、この鏡をゆづりけるとかや。」
- (8) この「果報」は頼朝の果報をさすものであり、盛長は頼朝ほどの果報を持ち合わせないが、手跡に関しては頼朝には劣らないという文脈。
- (9) 注6同書の校異によれば、近衛本に「きみ」蓬左本に「奉公」とする。
- (10) 「叙事文学から劇文学への歩み―古浄瑠璃曾我物語七巻物を中心に―」帝京大学文学部紀要(国語国文学) 第一九 p.151～174。一九八七年一〇月。

本稿作成にあたっては、二〇〇九年度東京学芸大学大学院古典文学士の授業、二〇一一年度國學院大学大学院日本文学特論AⅦの授業における購読の成果から多くの示唆を得た。授業参加者の熱心な取り組みに対し記して感謝する。